

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村, 哲、ペシャワール会 編著

空爆と「復興」 現地ワーカー報告
(1/3、2001年)

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告, pp.105-150, 2004-05. 石風社
バージョン：初版 2004-05-31
権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004
石風社より許諾を得て本文を公開しています。
公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



空爆と「復興」

現地ワーカー報告

複製・出力・二次利用禁止

すぐ隣の国の子供なのに

PMS（ベシヤワール会医療サービス）看護部長

藤田千代子

協力的だったタリバン

日本ではタリバン政権が悪の権化のように表現されていると聞いて驚いている。『ザ・グレート・ゲーム 内陸アジアをめぐる英露のスパイ合戦』を読まれた方はよくお解りかも知れないが、あの部族同士の争いの絶えなかったアフガニスタンを、イスラムの教えの下に九五パーセントを治めたのは、驚くべき事だと思っていた。

個人はタリバン政権の人達と関わりはないが、昨年四月よりアフガン内にあるグラエヌール、ダ

ラエピーチ、ワマ診療所の運営に、次のようなことと関わるようになった。

ある時、北部同盟の管轄地にあるワマ診療所のスタッフが、地元女性と良くない関係にあるので、ワマにそのスタッフを配置しないで欲しいと地元の人たちからの要請があった。中村医師は、彼らはタリバンの厳しさを知っているのでタリバン支配下にあるグラエヌールに移動させよと指示を出した。

また、診療所のスタッフの話によると全診療所の生活用品から医療器具までが古くなっており、変えて欲しいと申し出があった。全部の要求を叶えるとかかなりの出費になりそうで、特に医療器具はどのように管理しているのが判らなかつた（グラエヌール、ダラエピーチ、ワマの診療所のある地域は大変保守的な所でまだ外国人女性はいれない。これまで沢田さんという事務局の方が通訳で一度入られたのみ）。そこで毎月のスタッフ交代時に同行するスタッフに写真に収めて来るように依頼したところ、写真撮影は禁じられている

からだめだと断られた。が、いつの頃からか生命体以外は撮影してよい事になって、私も彼にカメラを渡すことができた。

さらに、今年三月から始まったPMSのカープルの診療所（半公営）で働く、タリバン政府派遣のドクターの勤務状態があまりにも悪い為、責任者のスタッフがタリバン政府に実情を述べたら、翌日から別のドクターを配置してくれた。カープルの診療を始める前には、タリバン政府との話し合いがじっくり持たれ、PMSは政治、宗教などに関係なく、ただ患者診療にあたるのみということとを理解してもらい、これまで良い協力関係を保ち、何の問題もなく運営してきている。

一緒に働くアフガン人スタッフにタリバンのことを聞くと、「音楽を聴くのが禁止、写真撮影が禁止、泥棒は手首から切り落とされる、最もスタッフが嫌がるのは、暑い中、顔中の髭を伸び放題にしなければならぬ事などを強制されるのがなあ」と苦笑いをするがタリバン政権は全く悪いのだとは言わない。

九月九日、北部同盟のマスードが暗殺された。

私も数年前まではマスードファンの一人だったので、この事件を喜んでいるわけではないが、これでアフガニスタンの九五パーセントを支配していたタリバン政権がじっくりと政治の安定に取り組めるだろうと、また、戦争の為にパキスタンへ避難していたアフガン人達はしばらくしたら帰ってゆくのだろう、早魃かんばつに対してはどうするつもりなのだろう等と、これから造られてゆくであろうアフガニスタンと、戦争の為二十数年という長い間国内外で苦しんで来たアフガン人達の上に、希望が見えていたのだ。

スタッフの中には以前マスードの元で働いていた人や、出身地が同じであるマスードを崇拜している人もいる。そのスタッフも、タリバンの後ろにはパキスタンがいるんだ、と非難するのみで悪の権化のように言わない。彼らの家族はタリバン支配下にあるカーブル市内に住んでいる。こんな事をペシャワールで見聞きしていると、日本でのタリバンに対する反応がとても恐ろしく感じら

れる。日本人は、このアフガン人よりもタリバンの事を良く知っているのだろうか。そのうえで批判しているのだろうか。

「ジャイサデース、ワイサベース」

なぜ私達の活動がアフガニスタンで受け入れられたのかを考えてみた。私が出した結論は「ジャイサデース、ワイサベース」だった。「お国にはお国の慣わし」。日本人ワーカーがベシャワールで働くようになると必ず中村医師のウルドゥ語教室に参加する。その際使う、先生自作のテキストの中にあるウルドゥ語の一文章である。その後「お互いに理解しあうのには時間がかかるがゆっくりゆっくり解ってくるでしょう」と続く。

私達女性ワーカーは頭をいつもショールで覆い、長袖ワンピースに長ズボンを一年中身に着けている。外出するときは身を覆い尽くすような大きなシートを使う。場所によっては目だけ出して顔中を隠す。これはここでは普通の事である。以前はブルカを着てバザールへ行っていた時もある。買

い物をする時に両手が使えるので便利だった。もし私がこのようにせずスカートを着たり、体にびったしのズボンを着てバザールを歩いたなら、男性達は（女性も）私を売春婦と見るだろう。

これを聞いて何と時代遅れな所だろうかと感じる人も多いと思うが、これを変える必要があるとすれば、この国の人たちが問題視してゆき、少しずつ変えて行くのだろうと思う。パキスタンでも家の中では女性は結構強いのである。私は医療の仕事をするためにここにいるので、長くここにしようと思うのならば、やはりパキスタンの慣わしを重んじたいと感じている。それが自分の身を守る一番大切な術でもあるように感じる。

「爆弾の鉄クズを売ってナンを買うよ。」

一〇月七日まではアメリカがアフガニスタンをいつ攻撃し始めるのか、この事がいつも頭にあり、ベシャワールにいる私も落ち着いて仕事に取り組めないときが多々あった。カーブル爆撃前も爆撃後もカーブルに残っている人たちは店を持つもの



PMS基地病院（ペシャワール）に来院した女性患者と子供たち。

は開店し、いつものように平静に生活している。うだが、予想も出来ないようなストレスだろう。カーブルにある五つの診療所も初日のアメリカの空爆が朝方四時過ぎまであったにも関わらず、全スタッフがいつものように八時には集まって通常通りに診療を行ったそうだ。今年（二〇〇一年）三月、カーブルの診療を始めるにあたり中村医師より全責任を与えられたジア副院長はこの報告を聞きながら涙ぐんでいる。もう何処にも行き場のない人達は強いのだろうか、とさえ感じた。

爆撃がまだ始まっていなかったある日、病院の始業前の会議で、ジア副院長が前夜聞いたラジオニュースで、アフガニスタンに住んでいる子供们对するインタビューの話をした。質問は「アメリカが爆弾を落としたり君はどうするか？」というもの。少年は「ここにはもう食べるものがないから、僕は爆弾が破裂したらすぐにその鉄くずを拾いに行つてそれを売りに行つてナンを買うよ」と答えたそうだ。聞いていた大人達は始めは笑った

けれどすぐに皆涙を流していたようだ。

すぐ隣の国にこんな子供達がいるかと思うと苦

しい。

(2001・10)

最悪の天災時に、この小さな町で

——9・11前後のアフガン——

水源確保事業担当 蓮岡 修

二〇〇一年九月二一日

一日の夜七時ごろ、現地の宿舎に隣接するCRC（国際赤十字）の顔見知りだったカナダ人のスタッフが意気込んで私たち現地スタッフが寝泊りする宿舎にやって来た。彼は興奮した様子で「すぐに我々の宿舎に一緒に来い」と言っ私を連れ出した。僅か二〇メートルしか離れていない

のに、彼はアフガン人スタッフを護衛に連れていた。たまたま早く仕事が終わったので現地にいる日本人スタッフ（目黒、石田、白石）らと一緒に前日に作った羊肉の燻製を前にお茶を飲み、やつと本格的に舌鼓を打とうとしていたところであった。気乗りしないまま宿舎に行くと数人の西洋人スタッフがソファアーに身を横たえて悲痛な顔をして衛星放送のBBCニュースを見ていた。「アメリカの世界貿易ビルがテロリストによって破壊された！」

カナダ人のスタッフはニュースを見ながら声を大きくして言った。

最初はテロが起こったのを把握しただけであったが、同じ情報を繰り返して報道してしてくれたため、少しずつ事実が分かってきた。誰かが「オサマの仕業かもしれない」と緊張した様子で言った。

火を噴くビルを見て思いだしたのは、一九九三年、同じ場所で起きた事件であった。それからすぐに自分の状況を思い出した。



改良した滑車を駆使して掘削中の井戸。右列手前が蓮岡

「我々は、明日より外国人スタッフの退去を始める。会合の予定も全てキャンセルする。私は責任者なので数日間ここに残って指示を待つ。君らはどうする。」

彼の言葉に私は「指示を待つ」とだけ答えて、ICRCの宿舎を辞した。

我々の宿舎に帰ると、一緒に寄宿しているアフガン人スタッフが心配そうに寄って来た。彼らは誰もが持っている小型ラジオを耳につけながら最新のBBCニュース報道を確認して、事態の重大さに呆然としていた。と言うのは、彼らは三年前米国の巡航ミサイルによる攻撃があったとき、それを機に全ての外国系NGOが撤退し、発動していたプロジェクトが中途のまま終わってしまったため、せっかく得た職を失った者が大量にいたことを知っていたからだ。また周りの正当な評価を見て、現地でのPMSの活動は住民達をして「NGOの仕事への認識を一変させるほど」の作業態度だと言われていただけに、彼らの働く意欲とプライドは他のNGOとは比べ物にならないも

のがあった。ゆえに彼らは、仕事を失うことは、経済的にもだが、生きる上での希望も失うことを意味すると言っても誤りはないだろう。

二、三人集まってきたスタッフに対し、私は中村医師が常日頃から繰り返している言葉を自然に口にしていった。

「この忙しいときにごちゃごちゃと関係ない。目の前にあることに対しやれる限りのことをするだけだ。」

九月二日

次の日も、いつもの通り早くオフィスに行き、七時より作業を開始した。

全ての作業方セクションが一つの大部屋に机を並べているオフィスでは、その日もエンジンア達が声を荒げながら道具の配給や車の手配、破損分の道具の購入などのやり取りをしていた。現在四人いる現場監督及び監視員、特殊技術者、また一三台ある車輛の運転手などは、毎朝六時ごろから作業を開始し始めるが、その半分くらいはまだ

残ってチーフエンジニアの指示や、道具の補充手配などを待っている。私の机もその中にあるので、その日はほぼ全員が同じように事件の影響を質問してきて、私の答えに安心して自分の仕事に戻っていった。

飯場はんばのような雰囲気のおフィスから、みんなが現場に向かって出発し少し静かになった頃、機械化部隊（ウォーターポンプ隊、ボーリング隊、ハンドポンプ装着隊等の略）の責任者のハイルツラーが厳しい顔をして机の前やって来た。

「外国人が退去し始めています。今日は外に出ないほうがいいでしょう。」

彼は、三人いるチーフの一人で以前は国連職員としてアフガン東部一帯で仕事をしていたので土地の状況に詳しい。また平均年齢二八歳以下という、若者だけを集めたような組織の中で三〇歳を少し過ぎたところで、年長として皆の信任も厚く、対外交渉は彼の人脈に頼ることが多い。彼の言葉なので真実味があった。

彼は大方の情報を分析して外国人に対しての攻

撃が始まる可能性がある」と判断し、宿舎に帰ることを勧めた。だが私はこの時期にこそ活動を活性化させ住民達に我々の協力を喚起せしめようと考えていたので、彼には礼を言い、現場で井戸のアレンジメント（住民達に活動を説明し、住民側からの決定による我々への全面協力の同意を村の老人達と協議する）があつたので、調査員を連れてバイクで現場に向かった。

九月一三日

朝はまたいつも通り作業が始まった。この日の朝のうちに開いたチーフ会議（事務全般、一般作業、機械化部隊の各チーフ、目黒連絡員参加）で、一般作業を統括しているディグラー技師が最新のデータを分析をつけて発表した。

「毎日挙がってくる最新データの通り、現在の活動井戸数六二六ヶ所。水を供給している井戸五二四ヶ所。そのうちハンドポンプを設置して完成と見なしているもの三七四ヶ所。現在作業進行中の一ヶ所（データは毎日更新され、その日の夕方

までにコンピューターに入力して朝方には全ての井戸の深さと水位が記されたレポートがチーフに届けられる）ですが、最近水位の減少が激しく、ハンドポンプを設置した井戸三七四ヶ所中約四〇ヶ所で水位が五〇センチ以下になっています。このうち完全に涸れてしまったのが三〇ヶ所前後、日々増えています。またこれらに対してすでにアチン郡に派遣して作業開始待ちだったエンジニア三人を呼び返して一五ヶ所への作業を三日前から始めさせましたが、涸れる井戸が増えているので作業必要井戸数は変わりません。」

我々の作業は、一般掘削を住民達を指揮して進め水位が一メートルになった後、ウォーターポンプ隊を派遣し井戸底の水を吸水し、更に二メートルまで掘り進める、その後井戸内にコンクリートのリングを挿入し、上部を施工工事し、ハンドポンプを装着する、というような流れで進められていく。一般掘削の後は、五つの違うグループが流れ作業で投入されていくことになる。これらの複雑な日程調整は大変な仕事であり、また機械は現



掘削中の井戸から運び出される巨石

地の物を使うので故障も多い。やっと完成した井戸が涸れていくのは機械化部隊を組織しているハイルツラーにとっては身を切られるような辛さがあるのだろう。

「そんな急に涸れるわけがない。間違いいではないのか？」

彼は何度も突っかかるように問うた。完了の許可を出す基準は水位が一・五メートル以上又は、ウォーターポンプ作業を六日間続行して進展がない場合のみ。それでも水位が一メートルを切ったままで完了に踏み切ることはない。事実なら三、四ヶ月で一・五メートルの水位が減少したことになる。これに対してダイダ―技師はエンジニア用の井戸レポートを持ってきて説明を加え、事実であることが確認された。

エンジニア用のレポートを皆で見ると八月中旬から急速に水位の減少が確認され始めていた。これらを分析してダイダ―技師が冷静な意見を述べた。

「このまま山に雪がない状態が続くと、一〇月、

一月の最も水の減少する時期には今より更に七〇センチから一メートルの水位の減少が予想されます。もし再生作業に我々が着手しなかった場合、現在データで見ると一メートル以下の水位の井戸は全体の約四〇パーセントの二〇九ヶ所。完了井戸の中一二〇ヶ所前後が該当します。また八月初めから見回っていない完了井戸の水位は確認できていませんので、もっと増えている可能性が高い。ですので恐らく今まで手がけた半分以上の井戸に對して再生作業が必要になるのでは。」

彼の意見はデータに裏打ちされているので信用できる。なったものは仕方ないので緊急の対策をその場で練り始めた。会議の時間内に結論が出ず、また在庫道具との関係もあるので次の日に持ち越しになった。

会議の後、デバラ郡の長老会議から数人の老人達がゲートに来ていることを告げられたので、事務長に應對を頼んで後でその内容をレポートさせた。

デバラ郡はジャララバード西南へ車で二時間く

らいの所にある小さな郡だが、そこも早魃かんばつの影響で難民が日に日に数を増しているということだった。話を聞くと、やはり水位は下がりつづけてはいたが、八月頃からまた急に水位が下がり始めてきているとのことだった。この郡もソルフロッド郡も同じ山脈の雪解けを主な水源としている。これは局地的ではないかなり広範囲な早魃の到来を意味した。長老会議は地区の最高決議を意味するので丁寧な扱わなければならない。我々は寄付金で成り立っている内情を説明し、計画の可能な限り早い段階で調査隊を派遣し、作業を検討したいと伝えた。彼らはPMSの活動を賛美し遠くからここまで来なければいけなかった状況を説明した後、我々の仕事の手を休ませて申し訳ないと詫びて去って行った。アフガンの老人達を見ていつも思うのだが、彼らは決して威厳を崩さない。そして自分達に対し礼を強制しない。強く手を握って、目を必ず見据える。この時と同じ思いを感じたのだが、極限の生活を説明された後だけに彼らのその態度が痛ましくも、また神々しくもあつた。

午後、中村医師がベシヤワールから到着された。先生は長い悪路にも関わらずいつものように車を降りると、門番から事務員、総勢四、五〇名全ての者の手を一人一人握っていかれ、以前怪我をしていた者を見つけるとその容態を尋ね、専門的な指示を与えられた。

先生は厳しい目をしたまま、午後の会議の時間を尋ね、私を呼んで事務所で、現在アメリカを中心として世界で進行しつつあるアフガニスタンの攻撃計画の具体的な進行状態を説明され、今後の計画統行のために、現在のジャラバード事務所の機能を、地方に点在するログット、アチン両事務所に移動し、日本人スタッフは今後の日本政府との関係や、募金者への説明から一時ベシヤワールに帰還するように指示を受けた。中村医師自身も、諸々の事情が許すなら彼らを置いて安全圏へ避難するのは避けたかったことであろう。ただ活動は終わったわけではなく、今最大限の準備と有効な行動が望まれる、今は撤退するが、アメリカの攻撃を避けるため微力なりとも尽力する、とい

うような内容のことを黙々と語られた。

その後、オフィスからの連絡事項の後、中村医師が進み出て集まった全員に対して低く凄みのある英語で話し始めた。

「諸君の知つての通り、現在アメリカがアフガニスタンに対して攻撃を仕掛けようとしている。彼らは報復の為には罪のない市民を巻き添えにするのに何の躊躇ちゅうちよもしない。今、全世界はアメリカの世論、武力に従って、アフガニスタンを敵視し、攻撃の対象にしている。人々は狂気に流され取り返しのでないことを起こそうとしている。私はこの狂気に断固反対する。また、PMSは決して撤退しない。アフガニスタンと共に最後まで力をつくす。」

エンジニア達は皆一言一言にうなずき、最後には現地の言葉で賛同の掛け声を挙げた。それから具体的な予定を協議し説明するため、次の日は金曜日で休みだが、全員出席するよう指示が与えられた。エンジニア達にいつもの余裕のある笑みはなく、次の動きに対する不安と、当事者しか分か



完成した井戸の水を飲む中村（2002年。右はイクラムラ事務長、左は目黒）

りえない侵略に対する決意のようなのを感じられた。でも彼らは、会議が終わると何時までも中村医師を囲んで帰ろうとしなかった。先生は一人一人と握手をして「アルハンドウラ（随意に、幸あれ）」と声を掛けて回られ、そのうち照れを隠すように口早に指示を与えてから車で宿舎の方に帰っていかれた。

明日に対する簡単な打ち合わせを終えた後、宿舎に帰ると門番がICRCの外国人が何度も来て様子を聞いていたと言う。早速行ってみると、カナダ人のスタッフは元気なさそうにソファーに座ったまま、事件の経過などをかいつまんで話してくれた。

「ICRCではカーブル側からの命令を待っている。今、この町に残っている外国人は私とうちのもう一人のスタッフと、君のところの二人の四人だけだ。他は一三日に全員帰ってしまった。できるだけ早くここを出たほうがいい。帰るときには連絡するから一緒に来たほうが安全だ。町には出ないほうが良い。私はもう三日外に出ない。」

私は彼の親切に感謝して彼らの宿舎を辞した。帰りがけいつものように彼らのペットの毛の長い犬が、牙を出して私を威嚇し始めた。

「マックスだめだ！」

カナタ人のスタッフは怒って犬を追い出し私に「ソーリー」と詫びた。

実はこの犬には妙な癖がある。初めてわかったのはまだジャラバードに來たての頃、ICRCの宿舎のパーティーに招かれた時だ。私は一応洋服に着替えて、手土産に花瓶に庭の花を生けたのを持って宿舎に向かった。宿舎には二〇名程の西洋人たちが手にワインやビールを持ってお喋りをしていた。その中に毛の長いマックスが皆にかわいがられて足元を行ったり来たりして遊んでいた。私は招待してくれたスタッフに土産を渡し、ビールを振る舞われ皆と話し始めた。そのうちマックスが足元に寄って来て鼻をくんくんさせ始めたので私も手を出して頭を撫でてやろうとしたら、急に牙をむいて吼え始めた。

「マックスだめだ！」

スタッフはマックスの首をつかんで何度も頭をたたいたが、犬は同じように吼え続けた。

皆も騒然としてきたので仕方なくマックスは外に出された。

マックスを連れ出した後、西洋人のスタッフは何度もすまなそうに謝って言った。

「申し訳ない。こんなことは普通ではないんだけど。あの犬は、小さい頃捨てられていたのを前のスタッフ拾ってきて育て始めたんだ。だから、小さい時アフガン人にいじめられていた記憶がまだ残っているらしく、アフガン人スタッフに対しては今でも吼えたり噛み付いたりするのだ。君は誰かアフガン人と抱き合ったり肩を組んだりしただろう、その時匂いがついて君をアフガン人だと勘違いしたんだよ。」

アフガニスタンでは、男同士が抱き合ったり抱擁するのは当然の礼儀作法である。現場に出れば多い日で百人くらいとは肩を組んで抱き合う。またそれ無しでは彼らとの会話はあり得ない。ふとそう考えると回りでお喋りをしている小奇麗な服を



地層によってはボーリングによる掘削も行なわれた

来た西洋人達に対して急に疑問が芽生えてきた。「この人達はどうかやってここで仕事をしているのだろうか？」

場を乱した後ではつが悪くなったのと、次第に薄気味悪さに変わってきた彼らに対しての疑問に私は飲みかけのビールを残して急用を理由にその場は辞した。その時以来、何度か宿舎には行く機会があつたが、行くとたびにマックスは私に吼えてかかる。それを見て私は逆に「よかった。俺は大丈夫だ」といつも安心するのだった。

九月一四日

朝早くから、エンジニア達は一人も遅刻者も無しで集まっていた。中村医師が皆を前に昨日と同じような内容の話をされ皆を激励した。聞いていた全員が先生の持つ覚悟に胸を打たれたようだった。何故そこまでやってくれるのか？ 何人かの若いエンジニアが不思議そうな顔をして中村医師を凝視していた。

エンジニアの中で最も歳をとったグラムサキ技

師が突然手を挙げて中村医師を見つめたまま皆の前に進み出てきた。彼は中村医師に對しどうしても一言言っておきたいと断り、先生の手を握りながらしわがれた声で言い始めた。

「先生、私は今まで多くの外国の団体を見てきたが、あなた方はそれらとは全く違った。彼らは危険になると逃げていき知らないうちにまた戻って来た。彼らがやったことは名前の割には非常に僅かだった。だがここは違う。この状況で私はあなた方の誠意を確信しました。世界中が敵でもまだ大丈夫です。私はここで働けたことをとても誇りに思います。ありがとうございます。」

聞いている間中ずっと手を握っていた中村医師は、
「あたりまえのことをやりぬくだけである。ともにやろう！」と皆に向かって言った。

「ともにやろう！」。エンジニア達は中村医師の掛け声に合わせて連呼した。

今にも攻撃が始まろうとしているこの小さな町で、一つの誠意が試され確認されたところを私た

ちは不思議な気分で見ている。そして世界中の世論が頼っていた情報とは全く関係のないところで、着実に進みつつある地に足をつけた平和への動きがあることを私は確信した。中村医師の小さな体がエンジニア達に囲まれて見えなくなってしまうと、そこから出てきて今度は私と目黒の方に近づいて来て言われた。

「それでは後は頼みます。」

この言葉を、この一年私は何度となく聞いた。その度に責任の重さに息苦しくなりながら、任された以上は果たさなければならぬという勇気を与えられる。先生はこう我々に花を持たせながらも、全責任は自分が取ると公言しておられた。言われたことをやるだけだとその時我々も決意を固めた。

車に乗り込む時、中村医師は皆を振り返り日本語で「この中の何人かは今生の別れになるかもしれないね」と寂しそうに言われた。ジャララボード市周辺に家があるということを条件に盛り込んで集めたスタッフ達だけに、攻撃が始まれば犠牲の

出るものは確実に存在するであろう。先生はもう一度「では、やるだけやりましょう」と言い、いつもの様にみんなに敬礼をしてペシヤワールに向けて出発した。

見送った我々は、すぐに決められた作業を開始した。だが急に何台ものトラックが動く和政府が全体の撤退が始まると考え、また要らぬ説明に時間を取られる可能性があるので、時間をずらして別の道を通って目的地に向かって行った。

その夜は、何も起こらず平穩に過ぎた。我々は手荷物、門番の家に預ける荷物を再度確認して、最後になるかもしれないここでの夜を過ごした。

九月十五日・午前

エンジニア達はまだ暗い朝六時頃に事務所集まっていた。今日は全員現場に向いて、受け持ちの井戸及び周辺に我々が活動を一時休止する旨を伝える。ただこれが全面撤退などではなく一時期の体制建て直しであることを主に説明する。期間は一〇日間。また作業進行中の井戸に関しては

エンジニアの監督抜きで続行。その間の賃金は出ない。作業状態は残存の監視員によって一日一度は確認される。事故の場合の責任は住民側、等。

集まったエンジニア達は皆引き締まった表情をしていた。実を言えばこの住民達への説明こそNGOの撤退時には最も注意を払わなければならないところであった。チーフであるデイグーが以前ここで活動していた外国系NGOが、以前の攻撃の時に無様な撤退をした為に事務所は略奪に遭い、現場に残していたものは全て持ち去られたことを話し、住民側への説明の仕方まで注意深く指導した。エンジニアの中には、監督を抜いた住民達だけの作業は不安なので、残って監督を続けるという者がいた。彼は住民達とともよい関係を続けており、また住民達も作業だけでなく、周りの揉め事の仲裁や集会の幹事など仕事を越えての信頼を寄せていた。そのような志願者が結局四人現れた。残存部隊は、チーフ、監視員、事務員だけで構成される予定だったので、彼らは思わぬ助っ人に抱き合って感謝の意を表した。

準備は整い後は出発を待つだけであつた。非常時に人間の本质が見えると言うが、まだ危機が迫りつつあるというだけで、ある者は逃げ出し、ある者はたどろたえ怯えていた。本当の非常時はこのようなレベルではないと思ひながらも、同じ思ひを理解し、やれる範囲で犠牲を強いてでも尊い仕事をやり抜こうとしている者が、中村医師及び日本人のスタッフの声に集まつて、しかも思つていた全員がついて来てくれたことが、私には何よりも嬉しかった。この数日間目は目まぐるしく動いていったが、泥臭く、また人間臭い感動の場面を私は何度も目撃し、また自身も味わうことができた。

私は中村医師のようにはいかなけれども、皆を前にして最後の連絡をした。

「二四日まででは、ある者は通常通りの仕事を続行し、その他の者は家族と共にありそれぞれの考えで行動するように。二五日以降、私はできる限りここに帰つて来るようにする。また、万が一帰つて来れない場合は、次なる有効な行動のためにべ

シャワールで指示を出しつつ機械の購入作業にあたる。攻撃はあるか分からないが、もしあつたらその後すぐ迅速な作業続行が可能ないように機械ボーリングマシンを数台用意する予定である。その他、石田氏（「風の学校」派遣ワーカー）の指導によつて新たな削岩機の購入も進める。期間は空くかもしれないが実際の我々の仕事は継続していると考へてもらつてよい。第一事務所の方は移動したが日本側は撤退する意思はまつたくない。もし続けたくない者がいれば離れてもらつて構わない。中村医師と数人の日本人だけで勝手に続けるから。」

私はクワを振るう真似をした。皆大声で笑つて全員ついていきます！と現地の言葉で叫んだ。それからしばらく気持ちのよい笑い声は続いていた。その後、エンジニア達と一人一人握手をして彼らは並んだ一二台の車に分乗してそれぞれの仕事場に向かつて行つた。

私は見送らず事務所に入って大量にある最後の残務処理作業を始めた。



アフガンの子供たち

一 時ごろ 宿舍の 門番が 手紙を 持って やって 来た。 表には I C R C の カナダ 人 スタッフ の 名前が 書いて あった。 中身は 書きなぐる ように 「至急 連絡 しろ！ 我々は 一時間 後に ここを出る。 事務所 へ来る ように」と 書かれて いた。 すぐに I C R C の 事務所 に行っ てみる とカナダ 人の スタッフ が 倉庫の 薬品の 積み出し 作業を やっていた。 彼は私を 見ると 腕をつかんで 離れた ところへ 行き、

「事態が 急変し そうだ。 外国人は 危ない から 一緒に ここから 避難し よう。 P M S は 名前を 知らない 者が 多く、 緊急時 には 国境を 通過で きなくなる 恐れがある。 I C R C は 取り決めで 強引に 通過で きるので 我々と 一緒に 来た方 がよい。」

私は うなずいて 荷物を まとめる 為 に 事務所 に 帰った。 残務 処理を 手伝っ ていた 目黒 連絡員 に このことを 伝える と、 彼は 残った 全ての 者達に しばらくの 別れを 言うため に 急いで 部屋 から 出て 行った。 私は 最後の 支払い 等を 済ませ、 書類 と ノート パソコン を まとめると、 外に 出て 皆に 別れを 告げた。 皆先ほどの 話で 安心 している のか、 いつも と

同じように力強くお互いを抱きしめて別れの挨拶をした。

「残った仕事については安心してください。ベストを尽くします。」

二七歳の事務長のハンザマンが手を握りながら言った。彼はレポートの報告方法、一四日までの簡単な日程などを口答で再度確認し終わると、周りの者と同じように力強く私を抱きしめた。「帰ってこられるのをお待ちしています。」

彼の言葉に私は「ワタネマン ダル ダルンタ アスト（俺の生まれはダルンタへハンザマンの住む集落）なんだよ！」

と現地の言葉で答えた。隣にいた目黒も、「俺の家はグラエ・ヌールにあるんだ。まだ結婚してないけどな！」と現地の違う言葉で付け足した。

皆笑い、いつものように手を振った。彼らは我々がまた帰ってくるのを確信しているようだった。

九月一五日・午後

一時間後我々はICRCの車に便乗させてもらい国境に向かっていた。市外に出ると難民キャンプ跡地に石灰でたくさんの線が引いてあるのが見えた。それは家の形に区切られていて区画整備されているようだった。

「あれは地雷撤去の後かな？」

ICRCの運転手に尋ねると、彼は首を振って笑いながら言った。

「いえ違います。あれは政府がここ数日で描いたもんですよ。なんでも市が攻撃された場合は市の機能をあそこに移すつもりらしいですよ。」

平和に見えていた場所も戦争の準備が進んでいた。本気で都市の移動などを考えているということは、政府が長期化も辞さない徹底抗戦を考えている証であった。ここ数日間で政府は覚悟を決めたらしい。進行していた物事の速さに少し啞然とした。

国境はいつもの倍近いおよそ千人の人間が詰め掛けていた。皆運べるだけの荷物を持って殆どの

ものが家族連れのようにだった。ゲートのパキスタン側ではいつものように数人の警備員が棒やゴムパイプで押し寄せる難民達を打ち据えて、その中でパスポートを持っている者や、どこかの名のあつる団体の発行した身分証を持っている者だけを選び出し、まるで家畜を扱うように手荒く通過させていた。また何人かは賄賂の額を提示して家族を率いて通過していた。このような賄賂は半ば公然と行われており、いつもは一人二五〇ルピー（日本円五〇〇円。一般労働者の賃金四日分）で通過できるはずだが、テロ以降一人五〇〇ルピー以上に跳ね上がり、次第に値上がりをしているのとこのであつた。

パキスタン側は小隊規模の軍隊が要所に待機しており、緊張が高まっていることを物語っていた。今からちょうど九年前、当時学生だった私は中古のカメラ一台と数本のフィルムを詰めた小さなバッグを持ってここを通過した。ソ連が撤退し、ムジャヒディン（イスラム聖戦士・武装ゲリラ）同士の抗争がカーブルで始まろうとしていた。私

は宗教戦争というものが見てみたくて、フリーのカメラマンとしてカーブルに取材に行こうと思っていた。戦争が続いているのにもかかわらず、ゲートは開け放しで、荷を満載した車に混じって、たくさん羊を連れた遊牧民がゆっくりと国境をまたいでいった。拍子抜けして近くにいたムジャヒディンに「戦争はどこでやっているのか？」と尋ねると、彼は笑って四方を指差し、「あつちも、こつちも、どつちもだ！」と言って笑つた。

そんなことを思いだして目の前の状況を見た。隙をついて入ろうとした老人を若い警備員が数人掛りで棒で叩き、チャグルを着た女性にまで警備員は手を挙げていた。その中をまだ七、八歳のぼろを着た子供達が、車の部品を頭に載せてパキスタン側に置いてあるトラックに向けて走つていった。彼らも捕まると鞭で打たれ血を流すのだが、そうやって国境の密輸をすることでなんとか生きているらしかった。

どこかの無菌室のようなきれいな部屋で決められた決議がこのような形である場所で具現化され

ることを何人の人が知っているであろうか。恐らく世界中の人がニュースで流れる狂信国家アフガニスタンという情報を文字の面だけで鵜呑みにしているのではなからうか。だが本来情報とはインターネットやきれいな言葉だけで伝えられるべきものではないのではなからうか。発信する者たちと抱き合い、睨み合い、熱や匂いを含めて感じて伝わっていく本当の意味での情報というものもまた、私が異端ゆえに執着するだけのものなのだろうか。

現場の状況は、私もまた当事者であり得ないのだから表面的な理解でしかないであろう。学生時代三度も危険を冒してアフガンに飛び込んだのは、宗教を持ち、その為に戦う人達の心を理解したくても、もう一步で近づけなかった自分に対して憤りを感じ、またそれに対し強い欲求と焦燥を感じていたからであった。結局その時は近づけなかった。しかし今、確かにまだそれは表面的であるかもしれないが、自分の中に情報というものが伝染していくのを感じている。

今現在、私はペシャワールから現地のスタッフに指示を与え続けている。国境はあれから完全に閉鎖され、ゲートの開くのを待つ住民達は一時三千人まで増えたと言う。一二日までにジャララバード市の住民の九割が攻撃を恐れ郊外の村に親戚を頼って避難しているため、市内はゴーストタウン化しているそうだ。郊外に避難した住民は避難先の家から食糧を分けてもらうことになるが、数年越しの早魃のため、麦の貯蓄は殆どない家庭ばかりで、飢餓が発生する危険もあるという。また最も深刻なのは水不足で、ただでさえ早魃の影響で井戸の水位が下がり、一人あたりの供給率が減っていると、避難民による人口増加が加われば一人あたりの一日の最低水分摂取量を大幅に下回る恐れがある。恐らく山際を流れる川から水を汲んできて対処するのであるが、一〇キロの道のりをどのように運ぶのだろうか。このような最悪の天災時に人道的でない攻撃を仕掛けようとする者に私は大きな怒りを覚える。

攻撃気運は日に日に高まり二五日に現地に帰れ

るのか分からなくなってきた。またエンジニア達が安全に作業できるかも分からないので、現在苦肉の策として道具を現地に配り歩いて住民達のやり方で掘らせ、当面の水源を確保させる方法を協議している。余程上手くやらないと現地で紛失する道具類は後を絶たないであろうが、この非常時には仕方がないと考える。

本日の敵はどこにあるのか分からない。だが私は今日の前に展開している天災に対し戦いを続けたいと思う。現地では作業は止まることなく続いている。それを支えているのは、我々と心と同じくしている募金者の方々だと私は心から信じて疑わない。

最後に皆様へ、やるだけやってみますので、今まで以上のご理解と支援の方を宜しく願います。
(2001・10)

「日本人だけは信じる」

水源確保事業担当

目黒

丞すむ

まるで三途さんずの河原

私がグラエヌールに初めて行ったのは二〇〇一年一月一四日でした。

「グラエヌール」とは現地の言葉で「光の谷」という意味です。グラエヌールはヒンドウークシユの巨大な山脈に属する大きな渓谷です。北から南へとゆるやかに傾斜をしており、東西は比較的小さな山々が壁を作っているようにも見えます。ジャララバードの事務所から渓谷の入口は車で一時間ほどの距離です。

入口からグラエヌール診療所まではさらに三〇

分ほどかかります。悪路の為に時間がかかりませんが、実際の距離は三五キロほどです。

谷の入口であり最下流部に位置するのはブディアライ村です。周囲一面の褐色の土と岩を見た最初の印象は「さんず三途の河原」でした。かすかに残る平らな土地とその段差がそこはかつて畑だった事を気づかせます。

しかし中流部のアムラ村に入ると一変して緑の畑が広がり、「同じ溪谷の風景とは思えない」ほど景色が変わります。

畑の用水路や道沿いの小川に水が流れ木々は青々とした葉をつけていました。

案内をしてくれたヨセフが、「この水もあの畑も全てPMSのカレーズ（伝統的地下水路）によるものだ」と教えてくれました。それは奇跡のよきな光景でした。

診療所があるカライシャヒ村も麦が育っており、当時作業が進められていたもう一つの地域ソルフロッド郡との違いに驚きました。ソルフロッドは広大な平野の地域であり、半数以上の農地が放棄

されてきました。同行していた中屋氏（風の学校）派遣ワーカー）もカレーズの灌漑能力に驚いていました。

この時は日帰りの予定だったのでスタッフに見送られながら出発するときに、「この谷を救ったのはPMSの作業だった」とヨセフが告げました。少し大袈裟かとその時は感じたのですが、後でそれが事実だったと知る事になります。

古来の方法を崩さず

数日後、正式にグラエヌールの責任者に任命され再び溪谷に入りました。

グラエヌールの作業スタイルはジャララバード事務所直轄のソルフロッド郡と違い、ごく小規模でどちらかというと土着のものというイメージでした。

その頃のソルフロッド郡では数十人のサイトエンジニア（現場監督）と数人のスーパバイザー（巡回監督者）、数人のウォーターポンプメカニック、そして数百人のレイバー（現場作業者）が働



伝統的な木製滑車も活躍した

いていました。ドラエヌールはというと、ヨセフの他には三人のサイトエンジニアと、一人のメカニック、そして数十人のレイバーのみでした。チャルハ（土砂を運び出す為の滑車）も違うものを使っていました。

ソルフロッドでは蓮岡氏による工夫を重ねられたものをバザールに発注し、レイバーや住民達に貸し出すかたちでした。これは鉄筋で作られ回転部分にベアリングを仕込んで摩擦を減らすというアイデアを考案し蓮岡氏自身の手で設計されたものでした。

ドラエヌールでは古来の木製のものをそのまま使っていました。住民自身で大工に注文し井戸に水が出てからも汲み上げ用としてそのまま使われるものでした。

これらの違いは中村医師の方針によるものでした。ジャララバードの蓮岡氏には「組織編成を固め大規模で効率の良い作業」との指示でしたが、ドラエヌールでは「なるべく古来の方法を崩さず住民独自による作業を援助する」との指示でした。

特に危険性が無い限り、との補足がありました。この危険性の認識確認が最初の課題になりました。

現地アフガン人の多くが「生きる死ぬはアッラーの思し召し」という考えがあり、ほとんどの事を「まあ、大丈夫だろう……」で過ごしていました。たくましいと言えば聞こえはいいですが、実際はかなり危険な状態でした。

ドラエヌールは溪谷という地形もあり巨石が多くありました。ソルフロッドの巨石を中村医師は「子牛ほどの石」と表現されましたが、ドラエヌールでは軽自動車ぐらいの大きさの石が多数見られます。

ソルフロッドでの爆破作業は中屋氏の指導の下に元コマンドー（指揮官）のザルマイにより電気式信管を使用し、送風機で井戸底の空気を入れ替えるという安全対策が取られておりましたが、ドラエヌールでは井戸底の爆薬に導火線で火をつけ大急ぎで地上に出るといった危険なものでした。

住民の多くが内戦中に爆薬を使用した経験と多少の技術を持っておりませんが、慣れている為に危

険度の認識が甘くなっていました。

作業を一時中止させ電気式信管と送風機の導入を告げると、「元々、井戸掘り自体が危険な作業なのを承知の上なのに……」という不満が出るほどでしたが、

「日本で寄付をして下さっている人々の願いは何だ？ この早魘かんぼを乗り切り切り生活を取り戻す事だろう？ 生活を守る為の作業で事故死者なんか出せない！」と押し切りました。

カレーズから地雷が掘り出された事もありました。掘り出した住民達は三個の地雷を水に沈めていました。私が視察に回ったとき得意げに「これが出た」と見せてくれました。

この時はヨセフが血相を変え、「ミスター目黒、近づくな！ この地雷はまだ生きている！」と、私を下がらせてタリバンのオフィスに連絡をさせていました。

ドラエヌールには昨年の夏にマスード將軍派の兵士が侵攻してきており、その際に埋められた地雷の事故が時々起こっていました。地雷は水に沈

めたくらいで安全になるようなものではありません。

その後は畑の中を掘る場合は特に地雷に注意する事と、地雷を発見した場合は作業を中止してタリバンに回収させる事を指示しました。改めて指示しなくても分かるような事かもしれないませんが、忙しくなると「まあ、いいか」で済ませるこちらの気質を考えると必要な事でした。

田舎では当たり前の政策

ドラエヌールでのタリバンは驚くほど住民と一体化していました。

ある日、PMSの井戸掘りで働いていた若者がカラシニコフ銃を肩にかけて数人のタリバン兵士と共に歩いているのに会いました。

「今日はパトロールの当番の日なんだ。」

陽気な顔で私達にあいさつをしていききました。

私には誰がタリバンで誰が住民なのか区別がつきません。しかしこれはとてもいい形で政権と住民が融和しているのだと感じました。

ヨセフの話によるとタリバンが来る前はドラエヌールの大きな村には、それぞれにコマンドーがいてお互いに争っていたそうです。タリバンは新しく進駐する地域ではまず銃を回収し住民を武装解除します。進駐当時は抵抗した村人との衝突もあつたそうですが現在は落ち着いています。住民同士の争いは、タリバンのオフイスと長老達の仲介で解決されています。村同士ですら戦闘が絶えなかつたドラエヌールを統一したのはタリバンでした。

ヨセフはいつも私に言います。

「戦闘なんか良くない。みんな戦闘に疲れていたんだ。彼らはとにかく戦闘を終わらせてくれた。それが一番大事な事だ。」

村人にタリバンが来る前と何が変わったか聞いた事があります。

「何も変わらないよ。内戦が始まる前の状態に戻っただけだ。昔からの習慣を彼らがわざわざ法律にしただけさ。でも朝早くモスクに行くようになって朝食坊できなくなつたなあ。」

中村医師は「田舎者の政権だから田舎の人には当たり前政策」だと言われていました。

外国人の私にはどの政権が良いかと論じる事はできません。ただ、日本で思っていたような危険な軍事政権というイメージは、グラエヌールに限っては一切感じませんでした。アフガン人にとつての古き良き伝統を継承しようとしている様に見えました。

他の団体がこないからこそ

アフガニスタンには多数のNGOが活動していましたが、医療関係のNGOも決して少ないものではありませんでした。しかしそのほとんどの活動状況は呆れかえるようなものばかりでした。

グラエヌールには我々PMSの診療所以外にも二ヶ所診療所が存在します。存在はしていますが充分機能しているとは言えません。ひとつは公営（おそらく政府によるもの）ですが、私が水源調査の時に立ち寄ると、門衛がいるだけでした。医者には週に一度来る程度、看護師は農作業で不在、

医薬品は一切置いてなく、処方箋を作るのが彼らの限界だそうです。

もう一つはICRC（国際赤十字）の診療所ですが、これは小児マヒ対策のワクチン接種を目的に作られたもので、簡単な診察はできますが十分な設備とは言えません。

二月一日に中村医師と私が視察させてもらった時は近くに水源はなく、急患の場合はPMSのカレーズまで片道二〇分の距離を汲みに行っていました。しかし働いているアフガン人ドクター達は真面目に診療をしていました。

その状況を見た中村医師が私に尋ねました。

「目黒君、この地形をどう思う？」

周囲は岩肌の山に囲まれておりその中の小高い丘の上に診療所がありました。

「どう見ても井戸を掘るには難しい地形ですね。」と私が答えると、中村医師は即座に言われませんでした。

「ではここで始めよう。こんな所には他の団体は来ないだろうから、なおさら我々がやらんといか



あふれ出す水に子供たちも喜びを隠さない

ん。深くなるのも難しいのも覚悟の上だ。」
中村医師の一言で開始が決定しました。しかし他のNGOにとっては我々の作業の全てが癪にさわるのでしよう。

四月の後半になってICRCはGAA（ドイツ系建築NGO）に依頼して、遠く離れた山上の湧き水からパイプを引いて水道を作りました。この水道は無計画に作られたと言っても良いもので、長いパイプは日光に暖められ蛇口付近では熱湯になり、飲み水としては使えるものではありませんでした。

この水道が完成したのでICRCの職員が五月二一日に視察に来ました。その際にスイス人職員がPMSのレイバーに、
「この水道が完成したのだから井戸なんか必要ない。どうして無駄な作業を続けるんだ！」

との暴言を吐きました。怒ったレイバーは、
「こんなお湯なんか飲めるわけがない。今に見ていろ。もっと良い水を出して見せる。」

と言いつ返しそうです。

私は当時、現場におらず後で報告を聞いたのですが、スイス人職員達が帰った後でICRCのアフガン人医師達が謝りに来ました。

「我々アフガン人はPMSの仕事を理解していません。彼は外国人なので事情を知らないのです。どうか許してやって下さい。」

数日後、現場巡回中にそのアフガン人医師からお茶に招かれました。ドラエヌール出身で長くICRCに勤めている彼は、個人的にも中村医師を信頼していると言い、昔の出来事を話してくれました。

七年前に彼はベシャワールのICRC病院に勤務していたそうです。その時に病院の近くで交通事故が起こり、頭部に重傷を負った急患が運ばれてきて、偶然ながらその患者もドラエヌール出身で顔見知りだったそうです。かなり危険な状態だったのですが偶然、事故現場に中村医師が居合わせ、そのまま応急処置を手伝い的確に診断して、診察費も置いていったそうです。その患者は現在、ブディアライ村で元気に暮らしているのだ

と言います。

「誰が何を言おうと私はあの日本人医師を信じています。実際、我々の診療所（ICRC）だけでは限界があります。あなた達の診療所がなければこのドラエヌールはどうなる事か……。」

後日、ベシャワールに戻った際にこの事を藤田さんに話してみました。

「中村先生ならやりそうね。でも先生の事だからきっと忘れてるわよ。」

と、藤田さんは笑っていました。

九月一日時点でこのICRCのそばの井戸はまだ水が出ていません。すでに四〇メートルを越え、ドラエヌールの井戸では最深のものになっています。多くの巨石に悩まされながらそれでもあきらめず掘り続けられています。

「ここを緑にしたら面白かろうね」

カレーズによって甦った緑美しいドラエヌールでも、ブディアライ地域を巡回する時だけは、涸れた大地に直面する事になり気持ち沈みます。



グラエヌール、ブディアライ村の老人と子供

アムラ地域、クライシャヒ地域、シュキアライ地域とほとんどの地域で農業が再開される中でブディアライ村の農地だけが放棄されています。

ブディアライにもカレーズはあるのですが調査の結果では、地下水位の低下のため補修が出来ない状態でした。井戸では水位が下がれば掘り下げた水位を確保できます。しかしカレーズの補修とは長い年月で地下水路に溜まった土砂を掃除する事なので、一定以上に水位が下がると補修しても水を通りません。ブディアライだけが見捨てられた土地のような状態になっていました。

この状況の中、三月から始められたロダット郡の特殊な井戸が話題になりました。普通の井戸の口径は一・五メートルほどから二・五メートルですが、これを極端に広げ三・五メートル以上のものを掘り発電機とポンプで汲み上げて、畑に流すという灌漑用の井戸でした。何度か話題にはのぼっていたのですが、我々の範囲外として検討まではされていませんでした。アムラ村の緑の畑とブディアライ村の涸れた大地の境界で、中村医師は

いつも残念がっておられました。

五月二七日、中村医師とグラエヌールを視察した際に私に言われました。

「ここを縁にしたら面白からうね……。」

これは私とヨセフが心待ちにしていた言葉でした。

「目黒君、具体的な計画は立てられますか？ いや、何とかして立てましょう。いつまでもこんな状況をほっておけん。」

翌日、ヨセフをジャララバードに呼び、この計画を伝えました。中村医師の前では冷静な顔で聞いていたヨセフも、私と二人になると、

「今までの計画の中でグラエヌールにとって一番大きく重要で偉大な計画だ！」

と言って大喜びをしていました。

六月七日、国境のトルハムの街に井戸を掘る計画のためにタリバンが記念式典を開きました。

タリバン代表にはナンバー2と言われるモールビー・アブドル・カビール師が演説し、中村医師も大舞台で演説をされました。しかし私にとって

もっと重要な日は六月一五日でした。

この日、ブディアライ地域のすべての長老が集まりタリバンの地域責任者も来て、長老会議（ジルガ）が開かれました。この席で中村医師はブディアライで灌漑用の井戸を掘ると発表されました。口径五メートルの井戸を掘りエンジンとポンプを据え付ける所までPMSが行い、住民の責任で公平に水を畑に流すというものでした。

アフガン社会の中で長老の決定というのは絶対の強制力があります。この長老会議の決定には地域住民は従わなくてはなりません。この提案はタリバンも含めて全員一致で承認されました。

中村医師と長老達は住民に提供された場所に行き、お祈りを済ませ全員で鍬を大地に入れました。

「あなた達は絶対に逃げない」

八月の中旬からグラエヌールの再調査を行いました。その結果この二、三ヶ月で急に人口が増えている事が分かりました。PMSの活動で飲料水が確保された事により、村人が離村した親戚を呼

び戻していたのです。極端な所では昨年（二〇〇〇年）八月に三家族しかいなかった所で二五家族が一本の井戸を使っていました。

八月になると、パキスタンで政府による強制的な難民帰還計画が始まっていました。しかしそれよりも前に飲料水が確保されているという事だけで離村した人々が自発的に帰還していたのです。ジャララバードの蓮岡氏と検討し必要な場所には段階的に井戸を増やしていく事になりました。

九月一五日、アメリカで起きたテロ事件のため最後まで残っていた蓮岡氏と私も、ペシャワールに帰還する事になりました。

ジャララバードを中心としたソルフロッド郡、ロダット郡、アチン郡にはほとんどのスタッフに一週間の休暇を与えそれぞれで状況に対応する事にしました。しかしヨセフとガラエヌールのスタッフは作業を続行する事を決定しました。

「何かあるとすれば市街地が危険だけど、ガラエヌールは山間部だから問題無い。それよりも今は水の方が重要だ。」

ヨセフの意見は私や中村医師の意見と同じでした。

「ミスター目黒、帰ってくる頃にはICRCのそばの井戸も灌漑用の井戸も全部水が出ているはずだよ。だからあなたが帰ったらみんなでお祝いしよう。」

ヨセフは別れ際にそう言いました。

私がガラエヌールでの仕事を始めた頃、一人の長老に言われました。

「私達は一〇年以上もあなた達日本人の活動を見してきました。だから私達は知っています。あなた達は絶対に逃げない。色々な事があつたけど今まずとガラエヌールで活動をしている。私達はあなた達日本人だけは信じる事ができるんです。」

日本から八千キロも離れた小さな渓谷で、我々の事を心から信頼してくれる人々がいます。内戦や混乱の中で中村医師が一〇年以上続けてこられた活動が住民との絶対の信頼関係という形であらわれていました。「もう戦闘はいらぬ」という彼らの言葉が忘れられませぬ。

一日も早く危険な状態が終わり、一緒に作業を進められる日を待っています。(2001・10)

形なき誠意を届ける

水源確保事業担当 蓮岡 修

悪化した治安

アフガニスタンを巡る状況は今でも刻一刻と変化しており、一二月一〇日現在、アメリカ軍による空爆はいよいよ大詰めを迎えようとしている。ジャララバードでは、米軍と地元軍閥の連合部隊がオサマ・ビンラディンが立てこもると言われているジャララバード南西のトーラボラヘ一斉攻撃を開始した。現地からの連絡ではアメリカ軍の誤爆によって既に住民に二〇〇人以上の死傷者が

出ており、またジャララバード周辺だけでも七つの村が壊滅している。

タリバンがジャララバードから撤退した一二月三日当初は、権力の空白を狙って北部に陣取るパシャイ一部族部隊を筆頭にいくつもの地方ゲリラグループが銃で武装して市内に乱入して、市内にあった国連関係及びNGOの施設、事務所、倉庫を徹底的に略奪した。PMSも当初車輛を二台接収されたが後に返って来た。今回市内にあったNGO事務所で略奪を免れたのはPMSぐらいであった。これもパシャイ部族の中心地グラエヌールでの地道な活動を続けていた為である。

現在、警察権を委任されたパシャイ部族が、「目には目を」的な厳罰主義の治安維持を行っているため、一時期彼ら自身の手で行われがちだった略奪、暴行等の犯罪は激減した。

農村部に避難していた市民はパシャイ部族代表のハザラット・アリが治安の安定を宣言すると間髪いれず市内に引き返してきた。しかし、彼らと共に今度は農村部からの避難民が市内に押し寄



米軍の不発弾

せてきた。これは、アメリカ軍の誤爆による被害が急増したのと、タリバンがいなくなった為に地方の治安が悪化して、武装盗賊が出没し始め、犯罪が多発してきた為である。また、多くの農村部では、ついに小麦の貯蓄が底をつき始めてきた。現地スタッフの話だと、援助を求めて十数キロ向うから猫車を押して農民達が市内にやって来て、援助活動の始まるのを待っているのだと言う。

人々は意外に逞しく……

早魃^{かんぢ}、戦乱、略奪、他国軍の駐屯、迫り来る寒

波……。問題は当たり前だが山積みのままである。

だがこれは大きな視野で捉えたアフガニスタンの現状である。情報の言葉に隠れがちな生身の人間の姿はこのような状況の中でも意外に強く逞しい。最近送られてきた現地からの写真には、PMSが現地で配った小麦や油を手に笑顔で帰路を急ぐ人々が沢山写っていた。食糧配給計画も、輸送路での治安の悪化のため一月一七日から現地への小麦及び食用油の配送を一旦中止し、一二月五

日までにカーブル、ジャララバードにあった全ての備蓄を配布し終わった。この約一ヶ月半の間に配給した食糧の量は小麦一四〇〇トン、食用油一四〇トン、配給家族数は分配量が変化していったが総合すると一万五千家族になる。これも問題なく輸送ができていれば最初の一次計画だけでこの約三倍を配給する予定であった。空爆が連日続いていたカーブルで、水源確保事業から転属してきたエンジニア二〇名と我々に協力したタリバン兵士は爆撃の音をすぐ近くで聞きながら、共に配給作業を続けていたそうである。タリバン崩壊前夜のカーブルで食糧配給を実際に行っていたのは、国連機関や赤十字ではなく、ペシャワール会と、オサマ・ビンラディンが支援していたと言われるアラブの団体だけであった。

調査班はカーブルを四分割して段階的に調査して、限られた量をできるだけ本当に必要なところに行き渡らせるように努力し、実際冬が来る前に飢餓に瀕すると言われていた極貧地区への配給は真っ先に行った。そしてタリバンが撤退し北部同

盟軍がカーブルに進撃する前にパシトゥン族の彼らもジャララバードへ帰還した。当時北部同盟の中核であるタジク民兵が、パシトゥン族を迫害するという噂が流れていた為であった。

水源確保事業は、やはり空爆が続いていたさなかにも安全な方法を選んで着実に進められていた。ジャララバード周辺は多くの軍事基地が点在し、また市内から三〇分ほどの所にオサマ・ビンラディンの隠れ家とされている場所があった為、連日空爆が続けられ、誤爆によって我々の作業地でも一二〇人の死傷者が出ていた。また空爆によって話題には上りにくくなってきていたが、早魘の影響は確実に進行しており、三ヶ月で我々の作業地平均して約四〇センチの水位の減少があった。この間の作業はこれらの水位減少によって使用不可能になった井戸に対しての再生作業が中心で、現在の状況は、以前開始予定だった場所を来期に繰り上げた為、全体作業数は少し減ったが総作業井戸数六三〇ヶ所。このうち水源を確保しているのは五四〇ヶ所。ハンドポンプ装着完了四三〇ヶ



PMSの配給食糧を持ち帰る子供たち

所。驚くことに、空爆のさなかでも住民達からの井戸の陳情は続いていた。水不足による離村も冬になったために減ったが、やはり数件確認された。国連でさえ現場では動かなかった時期に活動を続けていたのはペシャワール会だけだったのでスタッフの士気は以前より増して高まった。状況が好転し次第すぐにでも作業を開始する予定である。

人知越えた贈り物

以前井戸の作業中住民達とこんな言葉を交わしたことがある。

「早魘もあるし戦争もあるし、あなた達の生活と言うのはなんと大変なんだろう」。私の言葉に、三時間かけてロバで水を運んでいる村の長老が、井戸作業をしながら笑い飛ばすようにこう答えた。「何を言っている。これもみんなアラアの神の与えられたことだ。文句を言ってはいけない。」

また、同じ村で五〇メートル近い深さの井戸が完成した時、村の老人達が集まりささやかな昼食会が開かれた。貧しいが気持ちのこもった食事を

みんなで摂りながら彼らは満足そうに言った。

「今、こうやって新たな友と一緒に水も飲めて食べ物も食べれて、これもすべてアラーのおかげだ。」

彼らに届く小麦粉も油も、また井戸水も全ては人間のはからいを超えた贈り物であった。我々が届けられるのは形のない誠意以外に何も無い。住民が受け取ったPMSとマークされた小麦粉も彼らにとっては唯一の神アラーの御手によるものであり、またそれは援助という曖昧な言葉を当てるべき様なものではない。「やるべきものの為にやるべき事をした」その労力の代償が、住民達が最も大切にしている神への感謝の言葉によって還元される。

私はその事実が嬉しくてしかたがない。心の底からいいなと思う。このような作業をこれからもただ続けていきたいと思う。

新しい会員の方が沢山増えたということ、これからもっと多くの人への還元が可能となる。我々はただ、皆様の誠意を確かな形で還元するた

めにひたすら邁進まゐしんするだけと考えている。

(2001・12)

腰を据えて、一つの事業を

水源確保事業担当 日黒 丞

変化よりも継続を

「継続は力なり」――。

六年間お世話になった空手道場の師範が常に言われていたことだ。懇意にしていた浄土宗の寺院のご住職も、「むやみに変化を求めるときではない、成長は必ず後からついてくる」と言われている。現在、その言葉がよく理解できる。その言葉の重さが身にしみる。日本で生活していた頃には理解できなかった。言葉の表面だけを見ていた。



カーブル臨時診療所の中村

維持すべきは姿勢である事と感じた。

一年前にペシャワール会の現地活動に文字通り飛び込み、微力ながら必死で中村医師の指示の下に走り回ってきた。その間に大きな出来事や新しい活動が数多くあった。一見すると四方八方に拡散しているように見えるかもしれない。しかし現地で直に接していると二つの事に気付かされる。変わらぬ姿勢と的確な先見性である。「他の誰かが行かないなら、我々が行く」。そしてそこでの活動は絶対に必要なものだ。

二月にカーブルを視察された中村医師が突然に診療所開設を決定された。多くのスタッフが驚き、そして喜び、三月には活動が始まった。

「人々を餓死させるな」

六月にカーブルで診療所を視察する機会を得た。

「これだけの大都市が……」と絶句してしまった。

中村医師は「カーブルは巨大な難民キャンプになりつつある」と言われていた。破壊された広大な都市に早魃で故郷を追われた人々が集まっていた。

膨大な人口を抱えていながら活気は感じられなかった。その人々を支える行政機関が機能していない事にも驚いた。近代的な建物に大きな看板を立てた欧米NGOの病院を見たが、戦災外傷のみを対象としており、一般疾病は診察していないと聞いた。中村医師の言葉を聞いていながら想像力を働かせなかった自分を恥じた。もし診療所を開設していなかったらどうなっていたのだろうか。新聞にも載らず、関心を向けられることも無く、まるで当たり前のように、多くの人々、特に子供達が死んでいっただろう。

米国でのテロ事件が起こり、我々日本人スタッフはベシヤワールまで引き揚げた。八月下旬から下がり始めた水位に対処することもできず歯噛みするような日を送っていた。またも突然に中村医師が食糧配給を宣言された。

「アフガンの人々を餓死させるな。空爆とか制裁とか言っている暇はない。アフガンには他の団体はもう残つたらん。我々がやるしかない。」

現地にいた私にも想像がつかなかったほど突然

に巨大な計画が始動した。直後に空爆が始まり、アフガン国内で働くスタッフの安否を案じながらの活動となった。連絡の度に無事を確認した。現地のスタッフの士気が高いのを感じた。緊急時の臨時の組織とはいえ医療スタッフも井戸掘りのスタッフも信頼できる。誰もが食糧配給計画も自分の活動の延長であると自然に考えていた。

初めてジャララバードから配給風景の写真が届いた時、思わず笑ってしまった。

「井戸を掘っている時と同じ顔で食糧を配っているぞ。」

「なんだ、みんないつもどおり元気そうじゃないか。」

無医地区での診療活動、早魃地域での井戸掘り、そして食糧配給。形は違っていても、その意味は何も違わないと感じた。「他の誰かが行かないなら……」。その言葉が不幸ながら現実だった。

「他に配給をしてる者なんていないんだ。」

我々がカーブルで食糧配給を行っている間もW

F P（世界食糧計画）のトラックが、アフガンに大量の物資を運び込んでいた。しかしそれがケーブルに届くことはなかった。現地のスタッフからの報告ではケーブルの郊外まで来るのは時々見ることが、市内には一台も来ていない上に配給も行われていないと言う。報道によるとWFPは空爆を避けて山間部で配給を行っていると聞いた。山間部に食糧がないから避難民がケーブルに集まっていたのだ。その上ケーブルから離れる余裕がないから空爆の中でも留まっていたのだ。

「空爆が始まると地震のように家が揺れて眠れなかった。だが、他に配給をしている者なんていないんだ」とシャラフ医師が報告した。

「人が集まっている所が爆撃される。ケーブルの人々は逃げ惑うか死ぬしかない。けれど誰もケーブルを離れられない。だからやれる所までやってくる。」

この言葉を残してシア副院長はケーブルに戻っていった。そして本場に「やれる所まで」現地を活動していた。タリバンがケーブルから撤退し北

部同盟に制圧される前日まで食糧配給を続けていた。

シア副院長がケーブルを出る時には、既に大混乱が始まっていた。あと数時間遅れていたら最悪の結果になっていただろう。

マラリア流行も予測

「ケーブルが陥落したら欧米の援助が入ると思われる。その後はアフガン東部ニングラハル州に集中的に活動を行う。」

中村医師のこの方針も的確だった。諸外国の援助組織やマスコミは争ってケーブルを目指し、ケーブルに残っている私たちの在庫の食糧を配給すればそれまでの餓死者は防げると思われた。

そしてニングラハル州都ジャラバードからの連絡では悪性マラリアが流行していた。ジャラバードに残って指揮をとっていたシャラフ医師を訪ねてきたほんの数人の患者でさえ悪性マラリアと診断されていた。WHO（世界保健機関）の報告ではマラリアの流行が警告されていたにも関わ



空爆下、約30万名の越冬を可能にした「アフガンいのちの基金」

らず、ニュースとして流れることはなかった。六月の段階で中村医師と藤田看護婦はこの事態を予測していた。既に大量の抗マラリア薬が準備されており、人選と備品の準備が完了すると混乱の収まらぬジャララバード周辺で移動診療が開始された。報告では一日あたり二〇〇人以上の患者を診察しているとの事。

マラリアも多く含まれていたが、他の病気になっても診察を受けられない人が多くいた。

ニングラハル州についての報道は新政権と空爆についてのみで、本当に困窮している人々については何も報道されなかった。シャラフ医師の連絡からはほんの数日という短い準備期間で診療が開始されていた。腰を据えて一つの方向性で活動する、その上での確かつ迅速な対処ができるのだと思う。テロ事件以後、多くの偏った報道が流れていた。その度に「彼らは自分の言葉に責任を持てるのだろうか」と考えていた。そして同じ言葉を持った多くの援助団体が足早に押し寄せてきた。ペシャワールで大騒ぎをした後、あつという間にカーブ

ルへ乗り込んでいったが、彼らは腰を据えられるのだろうか。お祭り騒ぎの熱が冷めた後に何が残るのだろうか。大量消費の国、日本では数ヶ月前の歌が古いと言われる。アフガニスタンでは百年以上前に詩人が残した本を大事にしていた。時の流れが違うのかもしれない。それとも形ではなく変わらぬものが大事にされているのかもしれない。

(2001・12)

「一ルピーも無駄にしない」

PMS会計担当 中山博喜

誰が今日の混乱を想像しただろうか

私がペシャワールに来て八ヶ月が過ぎようとしている。水源確保事業の現場責任者・蓮岡さんの

誘いでペシャワール会の活動に参加すべく、四月下旬この地に足を踏み入れた。あのときから今迄、とにかくいろいろな事があった。現地語はもちろん、英語すらろくに話せなかった頃、とにかく現地の人々に慣れようと、診療時間が終わるとすぐさま病院の庭に飛び出して、患者さんたちと手ぶり身ぶりでいろんなことを話した。山村無医地区ラシュト診療所を訪れたとき、去年(二〇〇〇年)に引き続き、今年も氷河の崩落が発生。帰りの道、下流の村まで徒歩で移動した。もちろん井戸掘り活動にも参加した。今思えば、私がPMSの活動に参加しようと思ったあの頃、アフガニスタン、そして我々の活動がこのようにならうとは誰が想像しただろうか……。

九月一日、この月の初めよりPMS病院の会計勤務を任命された私は、八月下旬からそのための訓練を行っていた。その日も仕事を終え、夕食をとっていたまさにその時、ジャララバードの井戸掘りメンバーより電話連絡、「ニューヨーク世界貿易センターで何かがあったようだ」。慌てて



マラリア流行の報を受け移動診療を開始

インターネット、テレビ等のニュースで確認、「……どえらい事が起こってもうた」。その後、あれよあれよという間に形成されていった諸大国によるアフガニスタン包囲網、「ただでさえ天災によって苦しんでいるアフガニスタンの人々に、さらに人災を加えるとはなんたること!」と、顔をしかめながら言っておられた「風の学校」の井戸掘り技術者・石田さんのその一言は、そのとき現地にいたワーカー達の心情を見事に表現していた。

「食糧ば配ろう」

アフガニスタン国内で活動していた日本人ワーカーは、やむなくパキスタン側に移動。PMS病院での幾度にも及ぶミーティングにもかかわらず、この先どのような活動を行うべきか、何日もの間結論は出なかった。そうしているうちに職員達の間から「アフガン診療所は? この病院はどうなるんだ?」という不安に満ちた声があがり始めていた。そんな時だった。中村医師の発した言葉「食糧ば配ろう」。この一言でPMS職員に一つの

目標（今やらねばならぬ事）が見つかった。

その日からは猛烈な忙しさだった。この食糧配給計画を「アフガンのちの基金」と命名、公に発表してからの日本事務局の活動ぶりには本当に頭の下がる思いだ。次から次とかがってくる電話への対応、たくさんの方々からの寄付金、それらの仕分け、集計、確認、送金……数えれば切りがない量の仕事を一生懸命こなして下さった。現地の職員達も「このお金を一ルピーたりとも無駄にはしない」と、とにかく動きまわった。国連機関、諸NGOによる小麦粉、食用油の大量購入によって価格は数分刻みで変動していった。パキスタン側の食糧輸送班の指揮をとっておられたイクラムラ事務局長も、両手に受話器を抱えて「今はこの値だ。さっきまでこの値だった。この値で何とかならんか？」と、少しでも安く、少しでも多くの人々に食糧が行き渡るようにと懸命だった。

ニーズある限り

アフガニスタン側でも食糧配給を担当した職員

達（井戸掘り事業のエンジニア、病院職員による混合チーム）も、PMS病院副院長ジア先生の指揮のもと、とにかく安全・平等にと、必死になって調査や実際の配給事業を行った。もちろんこの期間もPMS病院はもとより、アフガニスタン山村部の三診療所、カール市内の五つの診療所、そのどれもが普段と変わりなく運営された。「私達は残る。住民達が我々を必要とする限り診療活動を続ける」と、それぞれの診療所職員達は活動を続けた。

一月一三日、アフガニスタンにおける我々の活動は、北部同盟のカーブル侵攻によって計画の変更を余儀なくされた。しかし我々の活動が終わったわけではない。アフガニスタン内の計八つの診療所は、今も何事も無かったかのように、普段と変わりない診療活動を続けている。「ここにはまだ多くの住民が残っている。我々PMSの活動が必要なのだ」。彼らはこう言って、活動の継続を報告してきた。

「今やらねばならぬ事。一生懸命やるべき事。」



ペシャワールの小麦倉庫で。PMS、JAPANの文字が見える

その地で一生懸命生き抜こうとしている人々が
いる限り、我々は可能な限りの活動を、これから
も続けていきたい。
(2001・12)

空爆下の村では
誰もが貧しかったのです

PMS副院長 ジア・ウル・ラフマン

聞き手・福元満治(ペシャワール会事務局)

「九月二日、私はカーブルにいました」

——九月のアメリカでのテロ事件以来、大変な半年間だったと思います。それについてお伺いし、我々の会報にレポートしたいと思っています。よろしく願います。

まず、九月以降のPMSスタッフの努力と勇気